

# 獄 中 記

<福山辰夫>

## 『獄中記』連載に寄せて

福山辰夫

『論語』（為政第二）に、孔子が自分の一生を振り返り述べた有名な言葉で、

「吾、十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順（みみしたか）ふ。七十にして、心の欲するところに従へども、矩（のり）を超えず」とある。

もうすぐ齢 56 になろうという男が、河原に生い茂る葦が風に任せて靡くが如く、未だに自己の思想すらも確立出来ずにただ右往左往するだけの無駄に命を削る日常を過ごす日々の中で、この孔子が晩年に述べた言葉に我が身を照らし合わせてみると、「吾、十有五にして任侠の世界に身を投じる。三十にして圜圜（れいご＝監獄）の内（うち）にあり。四十もまた圜圜の内にある。五十にして漸く社会復帰するも、無為な日を過ごし今日に至る…」。

そんな現実には焦りと憤りを感じつつ、間もなく迎える齢 60 にしてこの身はどうなっているのか、70 になった時にはどうだろう、という将来（さき）ことを考えると心が塞がれそうになってしまうのである。大体、将来のことなんて神のみぞが知り得る事であって、我々凡人が分かり得る筈がないだろう。当たり前ながらそれが分かっていたら誰も人生苦勞なんぞしないよ…と、各位諸兄からのお叱りを受けることだろう。

今は人生 80 年という時代となり、まだまだ 56 歳なんて人生はこれからだと思ふ反面、もし 80 歳まで生きたとしても残りの人生は僅か 24 年しかないのだなとも思う。

茲で、私事にて申し訳ないのだが、我が人生の履歴を少々語らせていただくと、昭和 39 年（1964 年）12 月 10 日に埼玉県川越市内の病院にて産声を上げる。いみじくも、私が生を受けたこの年は「有色人種」国家における史上初となる『第 18 回夏季・東京オリンピック』が開催され、バレーボール女子チームが「東洋の魔柱」と呼ばれて一大旋風を起こし、その期待に応えるべく見事に金メダル獲得。また、他の競技に於いても多くの日本人選手が活躍をして国威発揚と共に、全ての国民が歓喜の下での閉幕となった。

勿論、高度経済成長も絶頂期を迎え、東京五輪の直前である昭和 39 年 (1964 年) 10 月 1 日、「東京駅～新大阪駅間で新幹線」が開通。五輪前から着工された「首都高速道路」や「名神高速道路」に続いて「東名高速道路」が開通。五輪後もその勢いは止むことなく、昭和 47 年 (1972 年) 6 月 11 日、自民党の総裁選選挙を翌月に控えた田中角栄が発表する政策綱領の『日本列島改造論』と続き、右肩上がり経済が成長し、世界第二位の経済大国へと上り詰める。

我が国が戦後の復興から経済至上主義に突き進む中で、世界情勢は『東西冷戦』という時代に突入していた。米国の「核の傘の下」で、国家の核心ともいべき国防を他国に任せるといった、凡そ独立国家としての体もなさず、ましてや民族自決権を放棄し米国の属国としての道を我が国は選んでしまったのである。

昭和 25 年 (1950 年) 6 月 25 日、金日成の率いる北朝鮮 (朝鮮民主主義共和国) 軍が北緯 38 度線を越えて韓国 (大韓民国) に武力侵攻した事から『朝鮮戦争』が勃発。

昭和 28 年 (1953 年) 7 月 27 日に南北朝鮮の代表及び米中の代表が板門店で「朝鮮休戦協定」に調印するまでの期間、日本国内の基地から戦場へ向かう米軍の軍需物資を提供することにより経済的利益を得たことで (所謂「朝鮮特需」) 経済成長へと舵を切り、その後の経済的繁栄を迎える。

然れども、その繁栄の裏側では右派陣営と左派陣営による思想闘争が繰り広げられており、共産主義革命を目指す革マル派や中核派・全学連・全共闘といった左派の台頭著しく、全国で学園紛争を繰り広げて国家権力とも真っ向からぶつかるといった様相を呈し、世は正に「革命前夜」という状況であった。一方、右派陣営も全国の学生からなる学純同や日学同などが組織され、従来の生粋右翼をはじめ、任侠系といわれる者たちによる愛国主義者団体を派生させて対立構図を確立していく。

「もはや戦後ではない」といわれてから幾久しいにも関わらず、我が身の幼少期の記憶を辿ると、昭和 45 年 (1970 年) 11 月 25 日、東京都新宿区の陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地内東部方面総監部に乗り込み自決した「盾の会」の三島由紀夫、森田必勝らによる三島事件 (『盾の会事件』とも) や、昭和 46 年 (1971 年) から昭和 47 年 (1972 年) にかけて「連合赤軍」が起こしたリンチ殺人 (『山岳ベース事件』)。そこから続く、昭和 47 年 (1972 年) 2 月 19 日から 28 日にかけて、長野県北佐久郡軽井沢町にある河合楽器の保養所「浅間山荘」において同じく「連合赤軍」が人質をとって立てこもった事件 (『あさま山荘事件』)。

更には昭和 46 年 (1971 年) から平成 14 年 (2001 年) に解散を表明するまで武装闘争と称して、「日本赤軍」が世界各国でハイジャックやテロ、人質事件を起こした (『日本赤軍事件』)。

昭和 49 年 (1974 年) 8 月 30 日、東京都千代田区丸の内にある三菱重工ビルを標的とした、東アジア反日武装戦線「狼」班による無差別爆破テロ (『三菱重工爆破事件』) に始まり、昭和 50 年 (1975 年) 5 月 4 日、東アジア反日武装戦線「さそり」班による間組京成江戸川橋鉄橋工事現場爆破 (『間組爆破事件』) にかけて旧財閥系や大手ゼネコンの社屋・施設などに爆弾を設置し爆破した一連の事件 (『連続企業爆破事件』)。

昭和 52 年 (1977 年) 3 月 3 日、野村秋介ら四人が東京都千代田区の経団連会館に侵入して、「YP (ヤルタポツダム) 体制打倒青年同盟」を名乗り同職員 12 名を人質に取って会長室に 11 時間監禁籠城した事件 (『経団連襲撃事件』) と、当時のテレビニュースやワイドショーを賑わした映像の数々が脳裏に思い浮かぶ。この様な言論封鎖の殺伐とした時代背景による幼少期を送ったことで、何時しか我が胸裡には「国家」というものに対するなにがしらの思いというものが芽生えたのも不思議ではない。

ましてや父親の家系は鹿児島県の奄美大島にて、祖父を長男に男子 8 人兄弟の全員が帝国陸海軍いずれかの軍人であり、父の兄 (私からすると伯父にあたる) も「大東亜戦争」に帝国陸軍の軍人として南方戦線に出兵して戦死。今も、東京都千代田区九段北にある『靖國神社』に英霊として祭祀されていることから「日本遺族会会員」となっている。私自身、幼少期より帝国海軍上がりの祖父に手を引かれては『靖國神社』へと参拝すること数知れず、戦後 75 年を経た今日に至っても「日本遺族会会員」としても亡き父より引き継いでいることから愛国主義者となるべく素地は、このことからもお分かり頂けると思う。

しかしながら、これも我が家の血筋なのかは分からないが、何故だか幼少の頃より良くも悪しくも大人たちには私が何をやるにしても目に付いてしまうようであるらしい。所詮、世の中なんてものはどういったところで善行より悪行の方が目立つものである。当然の如く中学に入って早々に不良として頭角を現し、一時は『極真カラテ』の道場に通い稽古に汗を流したものの、「押忍の精神」と「質実剛健」からなる道場の指針が更なる右寄りの思想を育むといった結果となり、やがて中学三年になって進路指導の父兄面談で、「将来の夢は」と問う担任の先生に対して、「日本一の右翼になる」と豪語して憚らず周囲を呆れさせたのも今となってみれば、子供とはいえ何という大言壮語を吐いたものだと赤面ものである。

やがて受験時期を迎えて希望する右系の高校受験に失敗。気乗りしないものの担任に推薦され、滑り止めで受けた地元川越の県立高校に受かり、入学するも最早右翼になるとの夢叶わずと自暴自棄になった私は、全てを他人の所為にしてばかりで素行を改めどころか、益々悪に染まることに拍車が掛かり、高校入学早々から「**謹慎・停学**」を繰り返し受け、自主退学ということになるのだが、実情はクビ同然で学校を追われることになる。

今のご時世なら考えられない事だが、当時はまだ教師の体罰や暴言といったものがある程度許容されていたように思う。問題ばかりを起こして学校を辞めるとなると職員室に挨拶へ伺った私に向かって、担任教師の餞別の言葉が「**お前はヤクザになって、一生その辺のチンピラで終わるのが関の山だな**」であった。身から出た錆とはいえ、生来の反骨心と貴様がそこまで言うのならご希望通り「**ヤクザ**」になってやろうじゃねえか…、という反発もあってか任侠の世界に飛び込んだ次第であり、その後の人生は自分でいうのもおこがましいが、正しく「**因果応報にて波瀾万丈**」を地で行く渡世を歩むことになる。

決して、こんなことは何ひとつとして自慢にもならないが、18歳で浦和鑑別所2回、そこから久里浜特別少年院、水戸少年刑務所と出たり入ったりの日々が続く。そして、26歳の誕生日を迎えて直ぐに「**渡世の行きがかり上**」から長期服役の身となり、長期刑務所である宮城刑務所2回で懲役21年を務めた次第である。振り返ってみれば、我が囹圄の内での生活も通算で24年間とほぼ4半世紀となってしまった。

平成26年(2013年)1月4日、2度目の宮城刑務所10年の務めを終えてから早7年半が経ち、出所して直ぐに出版したのが獄中句歌集『**積もらざる雪－福山辰夫句歌集**』である。

当時、アジアを主体に民族運動を行う私の師であり『**行政調査新聞社**』社主の松本州弘先生に乞われて、宮城刑務所で約21年間綴ってきた「**獄中日記**」をお預けしたところ、この度松本先生より「**行政調査新聞の特別寄稿欄**」に連載してみてもどうかとのお話を頂いた次第である。

但し、日記などというものは自己満足の世界であって、本来は他人に見せるようなものではありません。ましてや、高々そこいら辺の無頼漢が綴った囹圄の内での日記なんぞ誰が読むのだろうか、そこになんの感慨を読者諸兄が抱いて下さるのだろうかと自問自答した。

大体、私自身ですら出所後に読み返す事など露とも考えてなかったもので、再三再四にわたりこの「**獄中日記**」を世上に開帳することは、我が師である松本州弘先生にも頑なにお断りをしたのである。

ただ松本先生曰く「人生は誰一人として同じ軌跡を辿ることなく、その一人ひとりにおいて人生の履歴がある」。一口に20年という歳月を日記とはいえ綴ることは容易ではない。

何故なら、それは一日一日の積み重ねの集積であって、誰もが経験をできない囿りの内という、所謂「社会の縮図」ともいわれる寄せ場で「人の世は喜怒哀楽の内を出でず」と喝破した王陽明（中国の明代の思想家）の言葉によって刮目したという箇所を目にして、如何に人間形成を図り、その思想体系を確立して来たのかを君のこの貴重な経験を逆に社会へ向かって発してみてもどうか…と。今回、囿りの内にて綴ってきた日記に改めて目を通しながら、原稿に起こすといった作業は正直私も苦勞が伴う。

この「獄中記」は、28歳から49歳までの心の変遷とその時々における悲喜こもごもなる出来事を綴ったものである。従って私も読者諸兄と共に、第三者の視点でもってこの連載を重ねていきたいと思う。尚、大学ノートにシャープ鉛筆による筆記の為、年数経過により保存状況の悪いもの、松本先生に御渡ししたものと別に自宅にて保管をしていたものの転居等で紛失しているものもある。また、年月日が飛ぶ箇所や入所当初の頃は毎日記載していないことや、長い務めの中では同囚とのトラブル・喧嘩事犯、刑務官に抗弁をして独居房において「懲罰」を受けた期間、病による病棟での休養生活をしていて筆記が叶わなくて日付が急に飛んだりとする箇所も多々見られるが、前以って茲にご了承願いたい。

娑婆に出て、よく周囲の者たちに質問を受けるのが「四半世紀にも及ぶ獄中生活に後悔はないのか？」と。そこで、私は必ずこう答えることにしている。「過ぎ去ってしまった日々には後悔をしたところで仕方がないと思っている。ただ人生は一度きりしかないのだから常に前を向いて生きるしかない」。続いて「然れども、その過去の行いに反省はしないと駄目である。何故なら、同じ過ちを何度も繰り返していたら世の人に見捨てられる」。つまり、いたずらに時を刻むことなく、人としての成長がないと、結局は誰も相手にしてくれなくなるということだ。

この様な世情が不安定なる時代に我が生を受けたのも、これはなにかしらの天命があつてのこと故ではないのかと沁み沁みと思う。反面、我が過去は常に悪の華ばかりを咲かせて他人や地域に迷惑ばかり掛けてきた人生であるとひたすら反省するだけである。いま、曲がりなりにも自身が民族運動という思想啓蒙活動を行う中で、もう一度我が身の負の部分となる履歴をなぞらせることで、残る人生を如何に生くべきか改めて考察する機会としたい。

**この連載を終えた時に、私自身が更なる成長したと感ずることが出来るのを楽しみにして…。**